

7月14日 WSレポート

「西成特区と釜ヶ崎の未来」 沖野充彦先生

M1 上田 健二

1、まず初めに、「西成特区」というと、小中高一貫スーパー高や観光といった、新しい物ばかり取り上げられているが、現地で従事する人間からすると見落とせないものが数点ある。

◇西成特区構想のカギは、釜ヶ崎（あいりん地域）が安定するか。

◇安定のカギは、釜ヶ崎で暮らす労働者と元労働者の暮らしが安定するか。

◇その方策を考える上で見落とせないのは、街と行政施策の歴史。

2、政策的につくられた街釜ヶ崎

◇61年第1次釜ヶ崎暴動後の66年、三者協議会設置（大阪府＝労働、大阪市＝民生、大阪府警＝治安）

◇70年大阪万博に向けた労働力のプール地化。（巨大な労働福祉センターと簡易宿泊所街）

◇その結果、家族の排除と単身男性労働者一色の街に（女性と子供がいない街）

3、行政対策の転換期

◇66年「あいりん地区」呼称（日雇労働市場を軸に、民生と治安をプラス）

◇94年高齢者特別清掃事業開始（バブル崩壊後の失業・野宿を背景に、行政が初めて能動的に、就労・生活対策に乗り出す）

◇2012年～西成特区構想

4、街の変化

◇単身労働者の高齢化

2010年には、街全体の41%が65歳以上の高齢者、30%が55歳～64歳となっており、高齢者の割合が異常に高い状況にある。

5、労働者の高齢化は、人口減に帰結するだけではない。

◇あらたな流入は続いている。

◇2009年6月、7月に市立更生相談所で生活保護の敷金支給を受けた407人のうち、来窯1年未満が27, 5%。

※「1年未満者の状況」

・46, 5%が50歳未満

・直近の生活場所は46, 4%が釜ヶ崎地域外。

・直近の仕事は「土木・建築」が58,9%

※上記から見える社会背景

- ◆減ったとはいえ日雇労働市場の存在と、それを取り巻く建設労働者の存在。
- ◆複合的困難を抱えた、若年・中年・高齢各年齢層の困窮者の存在。
- ◆地域や家庭や職場などから「排除」された人たちが、受け入れられる場所がない。

6、釜ヶ崎にできた社会資源

- ◇労働市場だけではない。
- ◇(官民双方の)生活福祉資源の存在。

◎これからの日本の困窮問題は、単身・孤立・困窮がキーワードに。

◇釜ヶ崎での実践は、地域で解決していく先進モデルになり得る

7、そのために何が必要か

- ◇地域での分厚いサポート態勢＝認知症でも障害があっても暮らせる街
- ◇働けるうちは働ける社会的就労＝特掃など公的就労対策と社会的企業育成を両輪に。
- ◇孤立させないための社会的居場所＝居場所としての働く場も
- ◇そのための財源づくり(社会的事業)＝「人が街を支え、街が人を支える」

8、釜ヶ崎の未来

◇釜ヶ崎(あいりん)を3構成で考える。それぞれに適した対策が必要。

- 1、太子・山王地域→観光資源・観光育成
- 2、萩之茶屋地域→重層的な社会資源を活用し、福祉と就労で支える街
- 3、花園地域→若い家族が住める街

※日雇労働市場＝就労過程をヤミ手配・駅手配に追いやらないためにも必要。

9、高齢者特別清掃事業

◇94年から府市共同で実施。99年から本格実施。労働者の気持ちの安定化に寄与。それを通じて地域の安定化に寄与。

◇現在登録者1486人。1日就労者数222人。

◇55歳以上の日雇労働者で、生活保護受給者以外が対象。

◇平均年齢は64歳(55～59歳20%、60～64歳42%、65～69歳24%、70歳以上14%)

※特掃の拡充により、生活保護だけでない生活支援策を立てられる。